

〔館員随想〕

海外調査報告
チェスタービーティーライブラリー

近年、大和文華館は大学との連携活動を進めています。協定を結ぶことで、博物館実習、展覧会見学の解説、学生の研究指導、大学内での講座開設など、大学教育により積極的に関わられるようになりました。研究活動においても、大学の研究者と共通するテーマのもとに研究を展開することができ、大和文華館の学芸員は日本・東洋美術を研究していますが、所蔵作品には、文学や歴史など、他の研究分野において重要な美術作品が少なくありません。共同研究によって、これらの作品を異なる専門分野の観点から再評価することができ、大学にも日本・東洋美術の観点から再評価すべき作品が所蔵されていることも考えられます。文献資料などの情報交換においても同様です。現在、大和文華館が連携協定を結んでいる大学は、神戸大学、奈良大学、奈良女子大学、大阪府立大学です。

大阪府立大学との連携協定は平成20年に結ばれました。この協定を機に、大阪府立大学内に説話文学研究所を開設しました。主たる研究テーマは「日本の近世を中心とする物語、説話の絵画化」です。研究員として、大阪府立大学から日本・東洋美術、国文学を専攻する五名の教員と大和文華館から浅野館長をはじめ、五名の学芸員の全員が参加しています。この共同研究によって、大阪府立大学と大和文華館が所蔵する和本の調査、研究会を定期的に開き、平成21年の8月には、大和文華館で特別企画展「物語と絵画」を開催しました。

この共同研究は、平成21年から平成25年度の予定で、文部科学省の科学研究費の助成研究に採択されたことで、活動範囲が大きく広がりました。平成22年1月24日から31日にわたり、

チェスタービーティーライブラリー、大英博物館で行った海外調査もその成果の一つです。

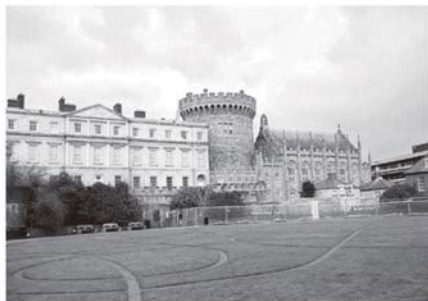
海外調査に参加したのは大阪府立大学から東洋美術史を専攻する河野道房准教授、大和文華館から浅野秀剛館長、学芸員の中部義隆、宮崎ももの四名です。それぞれの専門分野によって、中国絵画、日本の絵入本と絵入版本の三班に分かれ、希望する作品の調査を無事に行うことができました。最初に訪れたのは、アイルランドの首都、ダブリンに所在するチェスタービーティーライブラリーです。

その名の通り、チェスタービーティー卿が生涯をかけて収集した東洋の美術品、古書籍を収蔵し、公開している図書館です。チェスタービーティー卿はアイルランド系アメリカ人として1875年にニューヨークに生まれました。北アフリカでの鉱山事業の成功によって財を築き、豊富な財力をもって美術品、古書籍の収集につとめました。日本の美術品の収集も比較的若い頃から始められました。1917年(大正6年)に、チェスタービーティー卿は家族とともに世界一周の船旅をしています。その年の春に、東京、京都に立ち寄った際、奈良在住の沖田彌太郎氏が案内人を務め、当時、ニューヨークにも支店があった古美術商、山中商会の顧客として歓迎されたことが記録されています。この日本滞在から数年間に、多くの絵入本や絵巻物が収集されたと考えられています。さらに、1950年代の半ば、晩年に至ったチェスタービーティー卿はロンドンからダブリンに住居を移し、ロンドンの美術商、サザビーの日本絵画担当のヒリア氏を顧問にして、各地のオークションで浮世絵版画、絵入版本を精力的に収集しました。これらの所蔵品はダブリン郊外の住宅地、シュルーズベリー街

において、1954年に公開され、1968年にチェスタービーティー卿が93才の生涯を終えた後は、生前に作品の散逸を懸念していた遺志が尊重され、アイルランドに全作品が寄贈されました。作品の公開とともに、イスラム美術をはじめ、質の高い所蔵品は世界の注目を集め、目録が刊行され、論文が発表されましたが、日本の絵入本、絵巻は日本にさえそれほど知られていませんでした。一躍、脚光を浴びたのは、1978年にチェスタービーティーライブラリーで開催された世界初の奈良絵本国際学会です。この国際学会の実現に尽力したのは、ペンシルヴァニア大学の中世日本研究所長を務めていた女性研究者、バーバラ・ルーシュ氏でした。1963年、日本中世文学を専攻する大学院生であったルーシュ氏は、日本での留学を終え、アメリカへ帰る途上にアイルランドに立ち寄り、チェスタービーティーライブラリーの所蔵品に大きな感銘を受けました。その後も、ルーシュ氏は研究を続け、世界の日本学者に作品の重要性を知らせ、国際学会の開催にまで導いたのです。この国際学会によって日本をはじめ英米仏の四カ国の研究者による共同研究が始まり、大きな反響を生みました。その翌年には、作品の一部が東京のサントリー美術館、京都の思文閣美術館で展覧され、反町茂雄氏の編集によって、初めての作品目録となる『チェスタービーティーライブラリー蔵 日本絵入本及絵本目録』が私費によって刊行され、研究機関に寄贈されました。反町茂雄氏

は著名な古典籍商、弘文荘の主人であり、国際会議の参加者の一人でした。その後も、1988年には、サントリー美術館、神戸市立博物館、名古屋市立博物館の三館共同で「日本の物語絵 アイルランド・チェスター・ビーティー・コレクション」展が開催され、1995年には、ヨーロッパ諸国で日本美術を所蔵する主要な美術館の所蔵品を編集した全集の1巻として、『秘蔵美術大観5 チェスタービーティーライブラリー』(講談社刊)が刊行されています。

今回、私たちが調査することができたチェスタービーティーライブラリーの所蔵品の歴史を思いますと、作品に感銘を受けた多くの人々の努力によって、評価を高めていったことがわかります。美術館の学芸員である私たちにとっても、外部の研究者との連携による研究、展示、出版活動を通して、大きな成果を上げたチェスタービーティーライブラリーの活動は参考になります。チェスタービーティーライブラリーを運営する管理委員会をはじめ、日本美術を担当してきた学芸員、潮田淑子氏の功績を忘れる事はできません。チェスタービーティーライブラリーは、2000年にダブリン郊外から、市街地にあるダブリン城の敷地内に移され、これらの作品も鑑賞される機会が増えました。学会会議も盛んに開催されています。昨年に開催された第七回国際マニ教学会では、当館の所蔵品、「六道図」が世界でも数少ないマニ教絵画であるという意見が報告されています。(中部義隆)



ダブリン城

季刊 美のたより No.169

平成22年3月10日

発行 大和文華館